



天王祭

平成二十七年

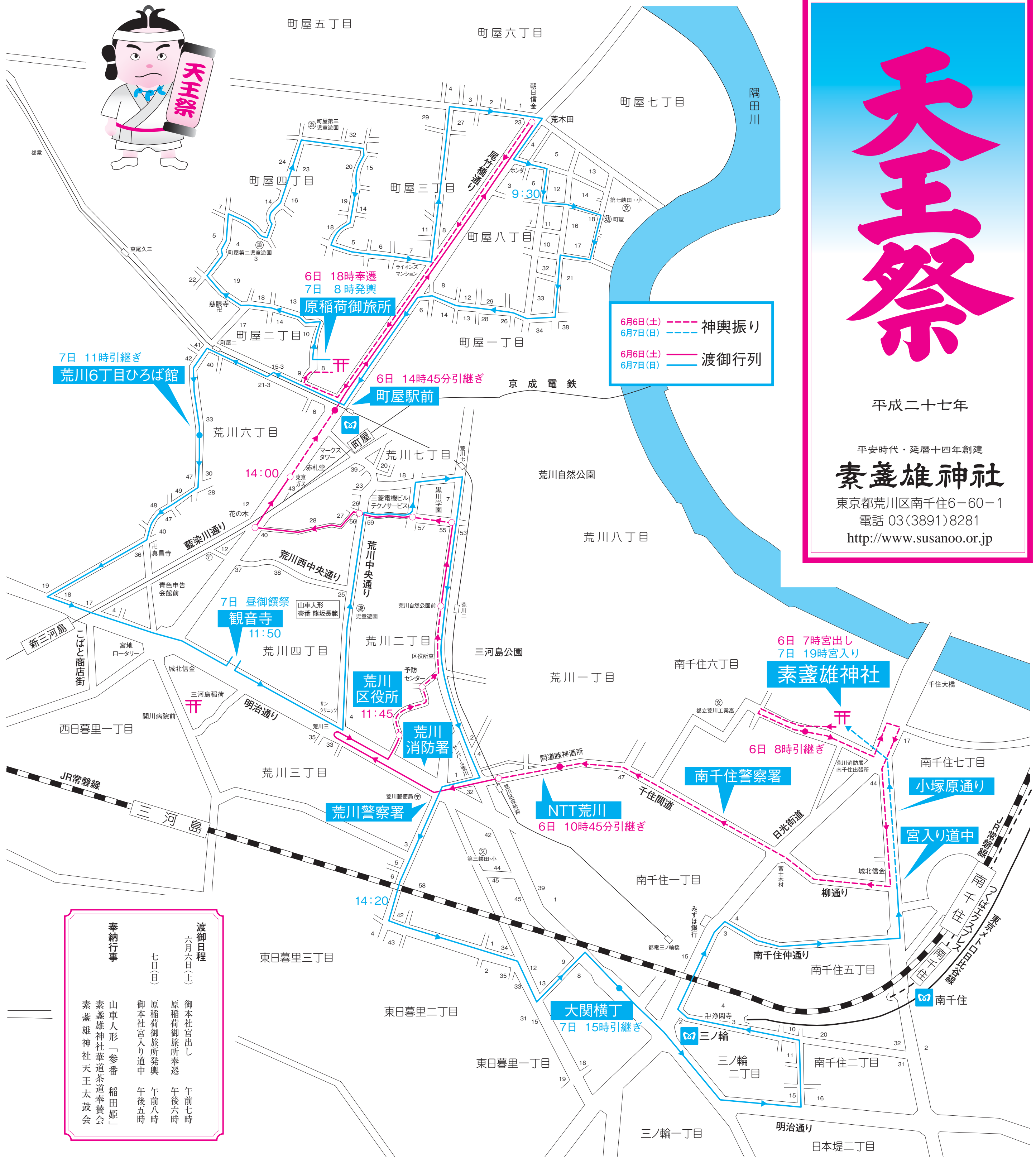
平安時代・延暦十四年創建

素盞雄神社

東京都荒川区南千住6-60-1

電話 03(3891)8281

<http://www.susanoo.or.jp>



6月6日(土) --- 神輿振り
6月7日(日) --- 神輿振り
6月6日(土) --- 渡御行列
6月7日(日) --- 渡御行列

渡御日程	
六月六日(土)	御本社宮出し 原稲荷御旅所奉遷 原稲荷御旅所奉遷 御本社宮入り道中
六月七日(日)	山車人形「参番 稲田姫」 素盞雄神社華道奉賛会 素盞雄神社天王太鼓会
奉納行事	午後七時 午後六時 午前八時 午後五時

天王祭



大祭日程

五月下旬

御旅所清祓式齋行(原稲荷)
稲田姫飾付け(神楽殿)

六月二日(火)

午後六時三十分

宵宮祭齋行

三日(水)

午前十時三十分

例大祭齋行

本社責任常任・三地区正副委員長
総代・祭禮委員・来賓招待者参列

午後七時

御本社神輿御神霊移し齋行
本社責任常任・三地区委員長
猿田彦命奉仕者・九番組参列

六日(土)

午前六時三十分

御本社発輿祭齋行

本社責任常任・三地区正副委員長参列
氏子全町高張提灯 西鳥居前集合

午前七時

《町屋方宮出し》

午前八時

西鳥居前《南千住三之輪方引継ぎ》
小塚原通り・千住間道神輿振り

午前十時四十五分

千住間道NTT荒川前《三河島方引継ぎ》
千住間道・尾竹橋通り神輿振り

午後二時四十五分

都電町屋駅前《町屋方引継ぎ》
尾竹橋通り神輿振り

午後六時

御旅所奉遷(原稲荷)

七日(日)

午前七時三十分

御旅所発輿祭齋行

午前八時

本社責任・町屋地区正副委員長・総代参列
発輿 町屋地区渡御

午前十一時

荒川六丁目ひろば館前《三河島方引継ぎ》
三河島地区渡御

正午

観音寺《昼御饗祭齋行》

午後三時

本社責任・三河島地区正副委員長・総代参列
渡御供奉員昼食

午後五〜七時

大関横丁《南千住三之輪方引継ぎ》
三之輪南千住地区渡御

午後五〜七時

《御本社宮入り道中》
氏子全町高張提灯 小塚原通り集合
小塚原通り神輿振り・宮入り

還御

本社責任常任・三地区正副委員長
総代・祭禮委員・九番組 手締め 解散

帰納祭

本社責任常任・三地区正副委員長参列

以上

三地区正副祭禮委員長

南千住三之輪地区

委員長
副委員長

齋藤 安弘 齋藤 誠
鈴木 昭一 石塚 好平
蛇谷 伸彦 長澤 保太郎
吉田 多六郎 杉川 多寿平

三河島地区

委員長
副委員長

齋藤 隆之雄 高安 武文 石川 欽也
江川 憲一 田所 一郎
渡辺 常一郎 三浦 裕男
近藤 澄一

町屋地区

委員長
副委員長

横井 正孝 小川 保殿 村田 美殿
原田 明殿 村田 進殿

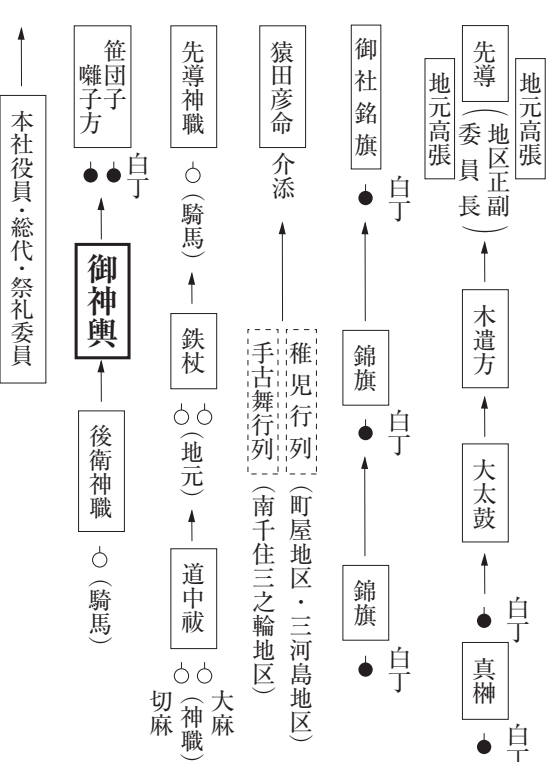
猿田彦命奉仕者

南千住三之輪地区

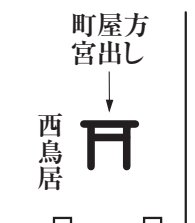
三河島地区
町屋地区

田島 紀男 福田 茂殿
木内 康文 原村 田殿

御神輿渡御行装



宮迎え



町屋 南千住 三之輪 三河島
十五ヶ町 十二ヶ町 二ヶ町 三十二ヶ町
町屋 南千住 三之輪 三河島
荒川ふるさと文化館

素盞雄神社は、平安時代延暦十四年(七九五)創建、隅田川に架かる千住大橋のほど近く、松尾芭蕉『奥の細道』旅立ちの地である日光道中の初宿の千住に鎮座します。春秋に稲の収穫を祈念感謝する祭禮に対し、天王祭は往来の盛んな街道の夏に流行する疫病を、激しい神輿振りにより、御祭神の神威をより一層振り起して祓う悪疫退散・除災招福・郷土繁栄を願う祭禮です。六月二日の宵宮祭、六月三日の例大祭では、六十一ヶ町総代をはじめ氏子崇敬者の参列のもと、厳肅な祭儀が齋行されます。

《御本社大神輿》

明治 十年 行徳 十三代 浅子周慶 調製
昭和 六十二年 行徳 十五代 浅子周慶 修繕

荒々しい神輿振りにより損傷激しく、大修繕を行う。昭和天皇米寿の佳き歳の五月八日、故事に倣い千葉県行徳より十数艘の船団を率いて三十数キロにわたる船渡御を古式ゆかしく齋行。

《鳳車》

大正十四年 君津 諸宮製作所 調製
平成二年 日光社寺文化財保存会 修繕

先の大戦により激しい損傷を受け、今上陛下御即位大典を奉祝し、日光東照宮等を手掛ける名匠工へ修繕を依頼。修繕完成を祝し、日光東照宮御神前において御禮の神輿振りを奉納。

《御本社中神輿》

平成七年 行徳 十六代 浅子周慶 調製

大神輿は、氏子域の若陸選抜によってのみ担がれる。伝統を護り次代に引き継ぐことを祈念し、女性や年少の者も担ぐことができるよう、皇太子殿下御成婚を奉祝し調製。

《御本社子供神輿》

平成二十年 栃木 小川政次 調製

幼少時からの体験を通じた伝統の継続・後継の育成を旨とし、秋篠宮悠仁親王殿下御誕生を奉祝し調製。

大・中・小三基そろった宮神輿二天の神輿振りから、家族・仲間・郷土の地域共同体意識の構築を目指します。

◆◆◆ 中今 ◆◆◆ なかいま

【現在・過去・未来】よく耳にする言葉です。祖先・先人たちが生きた「今」日々「積み重ね」の積み重ねが、子孫が待つ「将来」未来へと続きます。まさに、時の流れとは【無数の今】の集合体です。

まつり囃子の音を聞きながら親に手を引かれて山車を曳いた子どもたちも、小さな神輿の担ぎ手となり、大きな神輿と力強い担ぎ手に熱い視線を送り成長していきます。そして、やがては神輿を磨き綱を締め音頭を取るなど仲間との息の合った行動が、熱い視線や拍手喝采を受ける立場となり、地域社会において《受から授・個から公》へと成長変化していきます。先人先輩たちの姿を鑑とし、「おかげさま」の心をもって「今」を精一杯生きる。そしてその姿勢は、次の世代の【夢の種】をも担っています。

「伝統を護り、次代に引き継ぐ。」船渡御の御本社大神輿の大修繕以来掲げて来たこの言葉が示すように、天王祭二天の神輿振りには、「中今」の日本精神が息づいています。